

小敦盛 一段

祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響在り

沙羅の双樹の華の色 盛者必衰、その理を明かせり
驕れる者も久しく有らず、ただ春の夜の夢の如しと。

—これもまた、今は昔の物語。源氏平家の戦にて、平家一門、名立たる武者のその中で、物の哀れを留めしは、無官の太夫、敦盛公の最期にて、須磨の浜にて、熊谷次郎直実と繰り広げます一騎打ち。戦の性も現われて、その不条理を今の世に迄、問い掛ける。今の世に迄、問い掛ける。さてその折の敦盛公の出で立ちは、常にも増して華やかに、先ず肌着には梅の香りの好文木を焚き籠めた、唐紅の鮮やかさ。絹糸の彩り以て、秋の草花縫い取った薄紅梅の直垂に、左の手甲、両の脛当て引き締めて、萌黄緘しの鎧着け、鍬形打ったる五枚鍔の兜戴き、黄金造りの太刀を差し、二十四本の大中黒の矢を背負い、塗込藤の弓携えて、錢連ねたる斑紋の白馬の背なに、梨地に蒔絵、銀の縁取り施した優れた鞍を置いた上、

軽やかに打ち跨ったるその様は、善き武者振りにおわします、善き武者振りにおわします。

幼き帝、安徳帝を奉じつつ、平家一門、仮の内裏を遁れ出て、浜へと出るに、敦盛公もこれに随う。さて此の時に、敦盛公の命運つきたるしるしには、小枝と名づく横笛一つ、内裏の内に置き忘れ、若さの故の誤りか、捨て置き去れば、かくも大事に至らぬものを。名代の笛を内裏の内に忘るるは、末代迄の名折れと思ひ。取りに戻ったことにより、かれこれと時を経る内、一門乗せた御座船も武者たち乗せた舟どもも遙か沖へと漕ぎ出し終わる。痛わしや敦盛公は気力も失せて、次の泊りの、塩屋へ向けて、馬を走らせ遁れ行く。馬を走らせ遁れ行く。

是れはさておきここに又、武蔵の国の住人にして、武者の集まり・篠党の旗頭、熊谷次郎直実は、一の谷にて先陣を務めたものの、いまだにさほどの手柄もなく、無念をかこち、もしここに平家方にて善き大将の通らぬものか。騎馬に引き寄せ、組みふせて手柄挙げんと思う折から、

塩屋へ方へ遁れ行く敦盛公を見かけます。

すぐに直実大声あげて、

「それに落ちさせたまうのは、平家方にてよき大将と拝察いたす。かく申す某は、武蔵の国の住人にして、篠党の旗頭、熊谷次郎直実と申す者、源氏方にて知られたる好敵手にてあるものを、卑怯にも敵に後ろを見せらるるか？引き返されて勝負なされよ、お相手致す。」

扇を挙げて差し招く。

痛わしや敦盛公は、熊谷の声聞きつつも、心にかけて。落ち行く船の行方を追って、塩屋の方へ急ぎ行く。

敦盛公が遥かに沖を見渡すに、御座船一つ間近くあるを喜んで、腰に差したる日の丸扇取り出だし、沖なる船を差し招く。さてかたや、御座船の上、清盛公の弟なりし教盛公門脇殿は、その様をご覧になられ、伊賀の国平内左衛門元国を傍に呼び、

「さても元国、あれを見よ。船差し招く騎馬武者は、左馬頭行盛か。さもなければ無官の太夫敦盛か。皆も見よ。」との仰せあり。

悪七兵衛景清が、それに応えて、某が見て参ろうと、白柄の長刀ひっ提げて身体支えて船縁につと立ちあがり、兜傾け磯辺の方をつくづくと眺めては、

「げに痛わしの御事や。何故に御座船に乗り遅れさせたまうかな。あれに落ちさせたまうのは、経盛卿の子息にて、無官の太夫敦盛公にございます。馬の毛色に鎧の袖の印まで、少しも違うところなし。」

痛わしく申し上げるに、門脇殿はそれを聞かれて、

「敦盛ならばこの船を磯辺に寄せよ。」との仰せあり。船頭たちは命を

受け、ただちに船の楫を切り、磯辺に寄せんとしたれども、折から続く北風の激しく吹くに、名残の浪は今日も立つ、風は競うて浪は恒沙の如くなり。白波は船縁を超え、飛沫を天に打ちあげて、さながら雪の舞う如し。小船であれば右に左に漕ぎ寄すことも叶えども、殊に大きな御座船は、波に遮えられ、磯辺に寄する気配も見えず。

敦盛公は馬を泳がせ、船に乗ろうと思われて、手綱引き締め、海中に颯と分け入り、浮きつ沈みつ六間ほどは進んだものの、優れた馬であると言え、逆巻く波に遮えられて、泳ぎかねてぞいる内に、またも熊谷大声あげて、

「如何に平家の御大将、御座船遠く隔たつて、しかも波風激しくて、もはや逃れん術もなし。引き返えされて、勝負なされよ。返されぬなら、某が矢を射かけ参らせん。」

直実は弓に矢を引き番え、キリキリとこそ引き絞る。

痛わしや敦盛公は、かくも武運の極まる上は、矢に射られ命落とすは、平家一門末代までの名折れなり、いざ此処で勝負を付けん、弓に鏑矢引き番え、中空向けて引き放ち、一騎打ちへの合図とす。

熊谷次郎直実は、弓矢収め馬留め、心静かに待ちうける、心静かに待ちうける。